

幼児の社会道徳的逸脱行為に対する親の領域調整と関わり方

首藤 敏 元	埼玉大学教育学部乳幼児教育講座
利根川 智 子	東北福祉大学教育学部
樟 本 千 里	岡山県立大学保健福祉学部
上 岡 紀 美	仙台白百合女子大学人間学部

キーワード：親の養育態度、道徳的判断、領域調整、社会的領域理論、幼児

1. 問題と目的

Turiel (1983, 2002, 2006) は、道徳的発達に関する認知的構成主義 (Kohlberg, 1969/1987) の考えを発展させ、人は質の異なる社会的相互作用にもとづき、社会的規範を多元的に発達させるとする社会的領域理論 (social domain theory) を築いてきた。私たちは日頃、公正さ、他者の福祉、プライバシー、権利、集団秩序、他者との関係、世間体、自分自身の安全などに注意や関心を払って生活している。このような関心や注意は、社会的な場面を解釈したり行動を決定したりする際に働く社会的認知から生じる。社会的領域理論では、この社会的認知を領域 (domain) 概念と呼び、道徳 (moral) 領域、慣習 (conventional) 領域、個人 (personal) 領域の3つを区別する (首藤・二宮, 2003; Turiel, 1983, 2008)。これらの領域概念の区別は5歳の幼児でもある程度可能であることが分かっている (首藤, 2006)。

質の異なる領域概念は社会的相互作用の質の違いから発達する (Nucci & Nucci, 1982; Turiel, 1983, 2006)。首藤・二宮 (2003) は、幼稚園での遊びの中で生じるトラブルを観察し、幼児主導と教師主導の遊び場面では対人葛藤のタイプとその解決の仕方が異なり、幼児を主体とした遊び場面での葛藤体験から道徳領域の認知が発達することを示した。母親の幼児への言葉かけを記録した研究 (首藤・二宮, 2002) によると、母親は幼児の自由な遊び場面で「～しなさい」と「～してはいけません・止めなさい」のような言葉かけを頻繁に行い、幼児の自由意思による行動を制止・促進したり、自己管理を促したりしていた。そして、首藤・二宮 (2014) は、母親と幼児の領域概念の関連性を検討する中で、夫婦関係を独立した個人の関係というように個人領域から概念化する母親はしつけ場面で子どもに自己管理と自己抑制を育てるかかわり方を多くすることを見出した。そして、そのような母親に育てられている幼児は、個人領域を早く発達させる可能性のあることを示唆している。

親の養育行動は子どもの領域概念の発達にとって社会的相互作用の文脈として機能する。つまり、子どもの領域概念の発達にとって、親の養育行動、特にしつけ場面でのかかわり方は、子どもの領域概念、さらには道徳的発達にとって重要な環境要因のひとつになる。本研究もこのテーマを取りあげる。

人の社会的行動には複数の領域の要素が含まれている。子どもの逸脱行為の状況も例外ではない。首藤 (2006) と首藤・二宮 (2003) は、道徳、慣習、個人の3つの思考が、さまざまな状況で適切に機能し、多角的に思考すること、つまり領域調整して判断を下せることを道徳的自律と定義した。対人的攻撃行動場面を例にすると、道徳的洞察の発達は、単純に「いじめは暴力だけ

らいけない」と推測できるようになるだけでなく、たとえ他者の痛みが表出されていない場面であっても、あるいは校則違反や不適切な言葉づかいなどの慣習上の逸脱が目立つ場面であっても、複数の領域概念を働かせ、領域調整することで道徳的要素を見抜き、それを重視した判断を行うことであるといえる (Killen & Rutland, 2011)。首藤・利根川・樟本・上岡 (2019) は小学生を対象にした調査から、中学年以降、被害を受ける他者の感情に敏感であるという道徳領域の基本的な要素が、非道徳的な要素 (親への反抗) の影響がある状況下でも適切な善悪判断を導くことを示した。幼児同士の悪ふざけ場面には、表情や言動には表れない他者の苦痛、危険な行為、周囲の人への迷惑など、複数の領域の要素が含まれている。この状況にかかわる大人は、悪ふざけに隠されたいじめ、あるいは行為者が気づいていない他者の苦痛を洞察し、子どもへ適切なかわり方をする必要がある。このかわり方が、道徳的逸脱に敏感になるといった子どもの領域調整の発達を促すことになるだろう。

子どもの養育場面において、親は子どもの逸脱行為に直面した際、多元的な思考を働かせて状況を解釈 (領域調整) し、判断し、その状況に関わろうとする (首藤・二宮, 2014)。本研究は、子どもの逸脱行為に対して、親はどのような思考を働かせるのか、そしてその多元的な思考は子どもの行動を制止する関わり方の強さに影響するのかについて調査する。本研究は、逸脱行為として道徳的逸脱と慣習的逸脱を用いた。その際、首藤ら (2019) と同様に、親の指示に対する子どもの反抗 (慣習的逸脱) を場面に入れることで場面内の領域要素を複雑化し、親の多元的な領域調整を誘発する。また、多元的な思考をとらえる方法として、首藤ら (2019) と同様に、道徳、慣習、個人領域の自愛の思慮 (prudent) という3つの領域概念の要素を観点として提示し、関わり方の判断をする際に、それらの観点をどの程度考慮 (領域調整) したかについて評定してもらう方法をとる。さらに、父親と母親の多元的思考と関わり方の差違についても検討する。

2. 方法

(1) 調査参加者

埼玉県内の私立幼稚園に在園する幼児 (3歳児～5歳児、男児107名、女児89名、平均5歳7ヶ月) の母親122名 (平均35.3歳)、父親74名 (平均36.7歳) の計196名が調査に参加した。

(2) 子どもの社会道徳的逸脱場面

道徳領域と慣習領域の逸脱場面を2つずつ作成した。道徳的逸脱場面は首藤ら (2019) と同じであった。つまり、関係性攻撃 (仲間外し) と心理的攻撃 (仲間への悪口) であった。慣習的逸脱場面として、「お礼を言わない」と「食事のマナー違反」が用いられた。各場面は、「逸脱行為—親の指示—子どもの反抗」という簡単なストーリーになっており、話に出てくる登場人物 (子どもと親) は自分と自分の子どもであると仮定して回答してもらった。「親の指示—子どもの反抗」は、行為の判断をする際の非道徳的な要素として含められた。場面の概要はTable 1に示すとおりである。

(3) 質問項目

場面ごとに以下の質問が行われた。

① 領域調整

かかわり方の判断をする際に「考えること」を領域別観点として6つ提示し、参加者にそれぞれについてどの程度考慮に入れるかを3段階で評定してもらった。観点として、道徳領域1：人を精神的・身体的に傷つけていないか、道徳領域2：主人公の行為は人の道理に外れていないか、慣習領域1：生活のきまりを守っているか、慣習領域2：行儀正しくしているか、個人領域（自愛）1：主人公の行為が後に主人公自身の不利益になって戻ってこないか、個人領域（自愛）2：今後の人間関係で悪い評判がおきないかの6つが設定され、物語の内容に合わせて文章化されていた（Table 1）。

Table 1 社会道徳的逸脱場面と領域別観点

「お礼を言わない」(慣習－礼儀作法の違反)	
<ul style="list-style-type: none"> ・ゆうかちゃんはお友だちのあおいちゃんと一緒に園庭で遊んでいました。ゆうかちゃんは手に持っていたハンカチを落としました。 ・そこへ通りかかったまなちゃんがハンカチを拾って「ハンカチが落ちたよ。はい。」と言って、ハンカチを渡しました。ゆうかちゃんはハンカチを受け取りましたが何も言いませんでした。 ・ゆうかちゃんの親が「こういときは'ありがとう'って言うのよ。言ってごらん。」と言いましたが、ゆうかちゃんは「いいの。」と言ってそのまま行こうとしました。 	
領域別観点	
道徳1(M1)	ハンカチを拾ってくれたまなちゃんの心を傷つけているから
道徳2(M2)	ゆうかちゃんのしたことは人として絶対にやってはいけないことであるから
慣習1(C1)	ハンカチを拾ってくれたまなちゃんに対して失礼なことをしているから
慣習2(C2)	きちんと挨拶をすることができていないから
個人1(P1)	感謝の気持ちをもてない人になるかもしれないから
個人2(P2)	将来、人から「挨拶のできない子」と言われるかもしれないから
「食事のマナー違反」(慣習－礼儀作法の違反)	
<ul style="list-style-type: none"> ・食事の時間になりました。かずきくんは椅子に座り、椅子を前後に揺らしてカタンカタンと音を立てていました。 ・その揺れによってだいきくんのお茶がこぼれてしまいました。 ・かずきくんの親は「ちゃんと椅子に座りなさい。」と言いましたが、かずきくんは「この座りかたのほうが楽しいよ。」と言いました。 	
領域別観点	
道徳1(M1)	人の心を傷つけているから
道徳2(M2)	かずきくんのしたことは、人として絶対にやってはいけないことであるから
慣習1(C1)	人に迷惑をかけているから
慣習2(C2)	お行儀よく食べていないから
個人1(P1)	椅子が倒れてかずきくんが怪我をするから
個人2(P2)	将来、人から「落ち着きのない子」と言われるかもしれないから
「仲間外し」(道徳－関係性攻撃)	
<ul style="list-style-type: none"> ・ありさちゃんは友だちと仲良く遊んでいました。 ・みほちゃんは「入れて。」と言いましたが、ありさちゃんは「だめ。」と言いました。 ・ありさちゃんのお母さんは「みほちゃんも入れてあげて。」と言いましたが、ありさちゃんは「いやだ」と強く言いました。 	
領域別観点	
道徳1(M1)	みほちゃんが悲しむから
道徳2(M2)	仲間はずれにしているから
慣習1(C1)	みんなと仲良くするという約束を守っていないから
慣習2(C2)	人にやさしくしていないから
個人1(P1)	今度は自分が仲間はずれにされるかもしれないから
個人2(P2)	将来、友だちに「いじわるな子」と言われるかもしれないから
「悪口」(道徳－心理的攻撃)	
<ul style="list-style-type: none"> ・たくや君はゆうと君に「ボールで遊ぼう。」と言いました。ゆうと君は「遊ばない。」と言いました。 ・ゆうと君は「たくやは下手くそだから、一緒に遊びたくない。」と言いました。 ・ゆうと君のお母さんは「悪口はやめなさい。」と言いました。ゆうと君は「いやだよ。」と言いました。 	
領域別観点	
道徳1(M1)	たくや君が悲しむから
道徳2(M2)	人がいやがることを言っているから
慣習1(C1)	言葉づかいが悪いから
慣習2(C2)	友だちと仲良く遊んでいないから
個人1(P1)	今度はゆうと君が他の子に悪口を言われるから
個人2(P2)	将来、友だちに「悪口を言う子」と言われるかもしれないから

② 親権威判断

参加者は、主人公の子どもが親に反抗したことが、逸脱行為の内容とは関係なく、それ自体悪

いものであるかどうかについて二者択一の判断（0:悪くない、1:悪い）をした。この判断は、子どもが親の権威に反発することを親がどの程度重大視するかを表しており、親の親権威概念を反映すると考えられる。

③ 関わり方の判断

参加者は最終的な子どもへの関わり方をしつけの厳しさの観点から、場面ごとに4段階（0:見守る、1:やさしく、2:少し強く、3:厳しく）で回答した。

(4) 手続き

質問紙は園の保護者参加型の行事の日に、調査者が直接保護者に調査目的等を説明した上で、質問紙を配布し、協力を依頼した。応諾した保護者はその日の降園時までには回答し調査者に提出した。本研究は幼児の母親と父親を対象としているものの、両者を対応させて回収していないため、厳密には、同じ園に子どもが通う成人男性と成人女性を対象にしたことになる。しかし、参加者には園に通う子どもを念頭におき、複数の子どもを養育している場合には、園に通う年上の幼児を対象にして回答するよう依頼しており、実質的に「母親」「父親」と表記しても結果の解釈には影響しないと判断された。

(5) 倫理的配慮

調査は無記名で実施された。参加者は、質問紙の表紙の教示文と調査者からの口頭において、調査の趣旨と回答方法について説明され、協力を依頼された。説明内容は、調査への協力は任意であり回答途中でも中止できること、回答内容は研究にのみ使用すること、個々の回答が外部に漏れる恐れはないこと、回答用紙の提出をもって調査に同意したとみなすことであった。

3. 結果

(1) 親の領域調整

まず、慣習の逸脱（お礼を言わない、食事のマナー違反）を礼儀作法違反場面として、また道徳的逸脱（仲間外し、悪口）を攻撃場面として、領域別観点評価得点の合計値が3つの領域ごとに算出された。この得点は4点から12点の間に分布する。2（父母）×2（逸脱場面）×3（観点）のANOVAの結果、観定の主効果 ($F_{(2,388)}=123.20, p<.001$) と逸脱×観定の交互作用効果 ($F_{(2,388)}=425.67, p<.001$) が有意であった。Bonferroni法による多重比較の結果、攻撃場面では道徳>慣習>自愛、礼儀作法違反場面では慣習>自愛>道徳の順で、領域の要素が考慮に入れられていた (Figure 1)。

(2) 親権威判断

2種類の逸脱場面ごとに合計した親権威得点（得点は0～2）に関する2（父母）×2（逸脱場面）のANOVAの結果、反抗自体悪いとみなす判断の強さは、父>母 ($F_{(1,194)}=5.05, p<.05$)、礼儀作法違反>攻撃 ($F_{(1,194)}=10.70, p<.01$) であった (Figure 2)。

(3) 関わり方の厳しさ

逸脱場面ごとに合計した関わり方の強さ得点（得点は0～6）に関する2×2のANOVAの結果、

より強い関わり方は、父 > 母 ($F_{(1,194)}=8.15, p<.01$)、攻撃 > 礼儀作法違反 ($F_{(1,194)}=19.58, p<.001$) で見られた (Figure 3)。

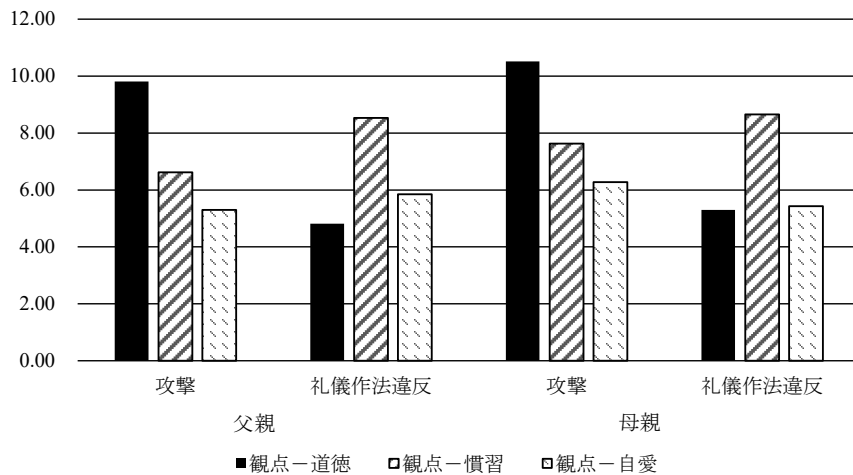


Figure 1 逸脱場面ごとの父親と母親の領域別観点得点

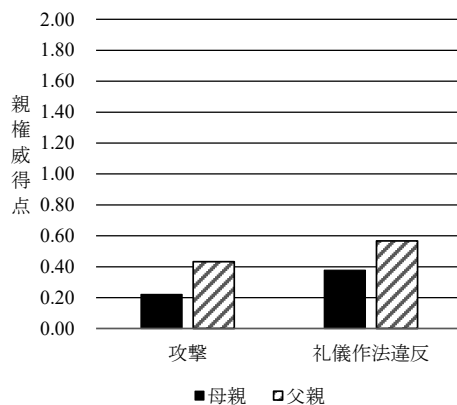


Figure 2 親の親権威判断

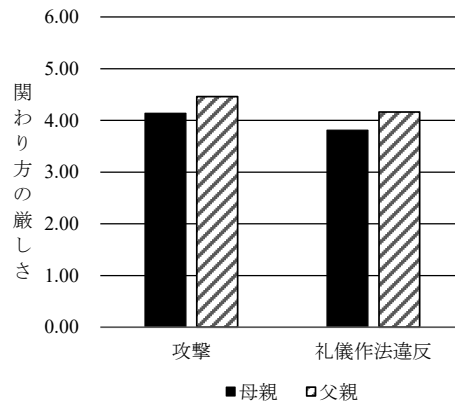


Figure 3 親の関わり方の厳しさ

Table 2 関わり方の厳しさを目的変数とした重回帰分析の結果

		父親		母親	
		攻撃	礼儀作法違反	攻撃	礼儀作法違反
親権威	β 係数	0.35 ***	0.20 †	0.00	-0.02
道徳的	β 係数	0.62 ***	0.19	0.12	0.12
領域別観点	慣習的 β 係数	-0.52 ***	0.09	0.09	0.15
	自愛の思慮 β 係数	-0.02	0.15	0.13	0.13
	重相関 R	0.61	0.39	0.29	0.34
	調整済みR ²	0.34	0.11	0.05	0.09
	F(4,69)	10.49 ***	3.14 *	2.64 *	3.85 *

† $p<.1$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

(4) 関わり方の厳しさに寄与する領域調整と親権威の影響

2つの逸脱場面ごとに、関わり方の厳しさの程度を目的変数、3つの領域別観点得点と親権威判断得点を説明変数とする重回帰分析を父母ごとに実施した。その結果、父親の関わり方に関して、攻撃場面では親権威 ($\beta=.35, p<.001$) と道徳的観点 ($\beta=.62, p<.001$) がプラスに、慣習の観点 ($\beta=-.52, p<.001$) がマイナスに寄与していた ($R=.61, p<.001$)。礼儀作法違反場面では親権威 (β

=.20, $p < .1$) がプラスに寄与する傾向が見られた。一方、母親の関わり方の結果にはこのような関係は認められなかった (Table2)。

4. 考察

本研究は、幼児の道徳的逸脱と慣習的違反場面での親の領域調整と親権威判断を分析し、それらと親の関わり方の厳しさとの関連を検討した。幼児を育てる親は、道徳的逸脱場面では道徳領域の思考、慣習的違反場面では慣習領域の思考を強く働かせていたように、幼児の逸脱行動の性質に合った領域概念を中心に領域調整をしていることが示された。それと同時に、親は道徳的逸脱場面であって慣習領域と個人領域の思考を働かせ、慣習的違反場面でも道徳領域と個人領域の思考を行っていたように、複数の領域にまたがった多元的思考を行っていた。これらの親の領域調整を伴う養育行動は、幼児の領域概念と領域調整にとっての発達の文脈になると考えられる。これらの結果は、母親の個人の権利の概念が幼児の個人領域の発達に寄与する可能性を示唆した首藤・二宮 (2014) の結果とも一致している。

子どもの逸脱行為よりも「親への反抗」を悪いとする親権威判断は全体的に低かった。しかし、父親の方が母親よりも若干権威を重視する判断をしていた。権威は、どのような集団にも存在する関係性にかかわる要素である。通常、家庭内にあっては親の権威は慣習上の規範として機能する (Laupa & Turiel, 1993)。本研究の参加者が、道徳的逸脱場面よりも慣習的違反場面の方で親権威判断を高く判断したことはうなずける。また、伝統的な社会では、父親は家族の中で中心的な役割を果たすことが期待されており、その父親という立場に付随する要素のひとつが権威である (Triandis, 1995)。本研究の結果は、日本の父親は母親よりも子どもの逸脱行為全般に厳しい関わり方をすることを示した Shuto & Ninomiya (2010) の結果とも一致している。

親の領域調整と親権威判断が幼児の逸脱行動に対する厳しさ関わり方をどの程度予測できるかを検討した結果、限定的ではあるものの有意な結果が得られた。つまり、幼児の道徳的逸脱場面での父親の道徳領域の思考と親権威判断は、父親の関わり方を厳しい方向に強めていた。また、その逸脱場面での父親の慣習領域の思考は父親の厳しい関わり方を抑制していた。一般に、子どもが他者の心身を傷つける言動をとった場合、大人は威厳のある態度でその行為を抑制し、子どもの自己統制力を育てるような関わり方が求められる。父親の道徳領域の思考は、まさに威厳のある態度を導くのもかもしれない。しかし、子どもの反抗や反発は、道徳的逸脱場面では本質的な要素ではなく、むしろその場面に付随する慣習的な要素としてとらえることができる。この場面での父親の親権威判断は、子どもの犯した他者への危害に対してではなく、自分の指示に対する子どもの反抗への権威主義的な関わり方を強めると思われる。この結果は、子どもの道徳的逸脱を慣習領域からとらえることが毅然とした態度を弱めてしまう可能性を示唆している。これらの結果は、子どもの反抗や親が場面の性質と異なる判断をすることが、親の道徳的領域調整を不活性化 (moral disengagement; Bandura, 2016) すると考えられるのもかもしれない。親の領域調整不全と親権威に影響を受けた親の関わり方は、子どもの領域概念の発達を抑制するのかもしれない。これらの仮説は今後検証される必要がある。

母親の領域調整と親権威判断は、母親の関わり方の厳しさを有意には予測しなかった。これは本研究が、関わり方の厳しさという親の養育行動の1つの側面しかあつかなかったことと関係しているのかもしれない。母親の領域調整は、養育行動に付随する言葉かけのあり方、子どもに

伝えるメッセージの内容に表れるのかもしれない (Grusec & Goodnow, 1994)。今後、親の養育行動をより広くとらえた上で、領域調整との関係を分析する必要がある。

青年と親を対象にした研究では、青年は親の権限が子どもの個人的好み、外見や友人関係の場面には及ばないと考えること、一方、親はこれらの場面にも権威を発揮しようとする事、その結果が親子葛藤に発展することを見出してきた (Smetana & Asquith, 1994)。親子葛藤の程度は問題となる場面の性質によって異なり、青年が個人領域から判断し親が慣習領域から判断する場面で最も大きい。しかしながら、このような場面においても、親は最終的には子どもの個人の自由裁量権を認める傾向にある (Smetana & Villalobos, 2009)。このような親子の葛藤を含んだ社会的相互作用の中で、子どもは領域概念と適切な領域調整を発達させると考えられる。今後、幼児と親を対象にして、両者の葛藤とそれを含んだ相互作用、その時系列的变化をとらえ、それらが幼児と親の領域概念と領域調整をどのように変容させているのか、さらに親子の関係性にどのような影響を及ぼすのかについて、より深く検討する必要があるだろう。

文献

- Bandura, A. (2016). *Moral disengagement: How people do harm and live themselves*. New York, NY: Worth publishers.
- Grusec, J. E., & Goodnow, J. J. (1994). Impact of Parental Discipline Methods on the Child's Internalization of Values: A Reconceptualization of Current Points of View. *Developmental Psychology*, 30, 4-19.
- Killen, M., & Rutland, A. (2011). *Children and Social Exclusion: Morality, Prejudice, and Group Identity*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Kohlberg, L. (1969). Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research (pp.37-480)*. Chicago: Rand McNally.) 永野重史監訳. (1987). 道徳性の発達：認知発達のアプローチ 新曜社
- Laupa, M., & Turiel, E. (1993). Children's concepts of authority and social contexts. *Journal of Educational Psychology*, 85, 191-197.
- Nucci, L. P., & Nucci, M. S. (1982). Children's social interactions in the context of moral and conventional transgressions. *Child Development*, 53, 403-412.
- 首藤敏元. (2006). 道徳と慣習の領域葛藤場面における幼児の社会的判断 道徳性心理学研究, 20, 1-6.
- 首藤敏元・二宮克美. (2002). 幼児と母親のつくりだす日常の社会道徳的文脈, 埼玉大学紀要教育学部 (教育科学), 51(1), 29-39.
- 首藤敏元・二宮克美. (2003). 子どもの道徳的自律の発達 風間書房
- Shuto, T. and Ninomiya, K. (2010). Conceptions of Personal Autonomy in Family Relationships in Japan. *At the annual convention of American Psychology Association 2010*, San Diego, CA.
- 首藤敏元・二宮克美. (2014). 子どもの道徳的発達の文脈としての母親の「個人の自律性」概念 発達心理学研究, 25, 356-366.
- 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美. (2019). 小学生における対人的攻撃行動場面での社会道徳的領域調整の発達 埼玉大学紀要教育学部, 68(2), 21-31.
- Smetana, J. G., & Asquith, P. (1994). Adolescents' and parents' conceptions of parental authority and personal autonomy. *Child Development*, 65, 1147-1162.
- Smetana, J., & Villalobos, M. (2009). Social cognitive development in adolescence. In R. M. Lerner & L. Steinberg (Eds.), *Handbook of adolescent psychology, 3rd edition*, New York: John Wiley

& Sons, 187-228.

- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Colorado: Westview press. 神山貴弥・藤原武弘 (編訳) 2002 個人主義と集団主義：2つのレンズを通して読み解く文化 北大路書房
- Turiel, E. (1983). *The development of social knowledge: Morality and convention*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Turiel, E. (1998). The development of morality. In W. Damon (Ed.), *Handbook of child psychology, 5th ed., Vol.3: N. Eisenberg (Ed.), Social, emotional, and personality development*. (pp.863-932). New York, NY.: Wiley.
- Turiel, E. (2002). *The culture of morality: Social development, context, and conflict*. Cambridge, England: Cambridge university press.
- Turiel, E. (2006). The development of morality. In W. Damon, Lerner, R. M., N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of Child Psychology, Volume 3, Social, Emotional, and Personality Development, 6th Edition* (pp.789-857), New York, NY: Wiley.
- Turiel, E. (2008). Thought about actions in social domains: Morality, social conventions, and social interactions. *Cognitive Development*, 23, 136-154.

付記

本研究の一部はJSPS 科研費JP17H02629の助成を受けた。本研究の実施にあたり、ご協力いただいた幼稚園の保護者の皆様と園の教職員の皆様に深く感謝申し上げる次第である。

(2019年 9 月30日提出)

(2019年10月10日受理)

Parents' domain coordination and method of dealing with child in socio-moral deviant behaviors of young children

Toshimoto SHUTO

Saitama University, Faculty of Education

Tomoko TONEGAWA

Tohoku Fukushi University, Faculty of Education

Chisato KUSUMOTO

Okayama Prefectural University, Faculty of Health and Welfare Science

Kimi UEOKA

Sendai Shirayuri Women's College, Faculty of Human Sciences

Abstract

This study examined how parents raising young children coordinate their cognition of different domains related to socio-moral deviant behaviors of young children, as well as how parents' domain coordination affects their method of dealing with child. Seventy-four fathers and 122 mothers raising kindergarten children were presented with two each of stories of children's moral and conventional deviation. For each story, participants rated how severely they interacted with their child using four-point scale, and then evaluated how they took into account cognitions of moral, conventional, and personal domain using three domain coordination evaluation method. It was found that participants adjusted their judgments focusing on the domain concept which was in agreement with the element of a deviation situation, and participants worked two or more domain concepts to a child's deviance. As a result of analyzing about the severity of dealing with a child's deviation, it was shown that participants judged their involvement was more severe with moral deviations than conventional ones, and fathers dealt with the child's deviance more severely than mothers. Following results were found as a result of the multiple regression analysis which made severity of discipline as objective variable, considering the elements of moral domain as important when judging moral deviation made dealing with a child more severe, and considering elements of conventional domain as important inhibited the severity. These significant relations were found only in fathers' judgments. These results were discussed, adding cultural factors, from the viewpoint of the function of parental domain coordination and child-rearing behaviors based on it to promote children's moral development.

Key Words: parenting behavior, moral judgment, domain coordination, social domain theory, kindergarten children